〈色彩の土地に航る〉……分かち合いの分岐点

アフリカを所有する〜その欲望の行方〜

坂井 真紀子

資本は世界を駆け巡り増殖を続け、ついに暴発した。これがヨーロッパを植民地支配へと突き動かしたエネルギーなら、この帰結は、命を育む土地や日常を奪われた人々にしてみれば理不尽な暴力以外の何ものでもない。だが、アフリカにやってきた白い人々の多くは、暴力を行使しようと思った訳ではなく、当時の「常識」に従い、ノーマンズランドが自分たちを待っているという幻想に胸を高鳴らせ、遅れた地域に神の教えを伝えて人々を貧困から救いたいと妄想を膨らませたのだ。

その時代を生きた人々は、身を置いた場所やそこで起きた出来事を、どのような色彩として感じ取っていたのだろう？　イサク・ディネセンは『アフリカの日々』において、水彩のようなさわやかな筆致で、ケニアのサバンナを包み込むからっと乾いた空気や抜けるような水色の空を描き出している。主人公である著者は、植民地期ケニアに入植しコーヒー農園を営むが、経営難のため最後には帰国を余儀なくされる。筆からあふれ出るのは、この地に対する愛着と困難に立ち向かいながらも充実した生活の喜びだ。そこで出会う「原住民」たちとの〝交流〟のようなものを慈しみ、朝もやに煙る遠いサバンナの薄墨色を味わう。だが彼女以外の人々は淡い水彩画の遠景に消え入りそうで、「わかり合えた」感触に乏しい。目の前の状況を自分なりに解釈する主人公と、「原住民」の間にある無機質な空間。だがその裏側には、ケニアの日常の喧噪があふれかえっているはずなのだ。そこに彼女は踏み込むことができない。

では、突然やってきた白人たちを、アフリカの人々はどのように見ていたのか？　痛快な小説がひとつある。西アフリカの偉大な文筆家アマドゥ・ハンパテ・バーの『ワングランの不思議――生きていたアフリカの知恵（L'étrange destin de Wangrin）』は、『アフリカの日々』とは対照的に、ポップな原色を基調とする油絵だ。灼熱の太陽に照らされたラテライトの赤土と空に突き出るバオバブの木々が目にまぶしい。主人公ワングランは、持ち前の言語能力でフランス植民地司令官の通訳になる。彼は、現地語を解さない司令官の信頼を勝ち取ることに成功。その地位を利用し、狡知を駆使して自己の利益の最大化をはかる。理不尽な権力を振るう司令官を手玉に取り、鼻を明かすトリックスターの活躍に拍手喝采である。面白いことに、このワングランと司令官の物語は、現在も開発援助の劇場で繰り返し上演されている。

青い空を、見渡す限りのサバンナを、オレンジ色の巨大な太陽を、自分のものだと勘違いしたのは白い肌の人たちだ。「所有」したいという欲望は果てしない。だがそれは無理なのだと、迎え入れたアフリカは知っていた。『アフリカの日々』はディネセンのアフリカへの切ない片思いの物語だ。だがそれは愛だったのか、執着だったのか。切ない苦みがあとに残る。

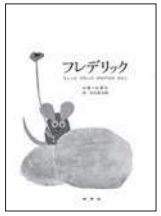
遅れた地域を開発するという発想は、「所有」という西欧的価値観と対をなしている。その地域で得られる利益を最大化し、所有できるパイを増やせば、多くの人が「持つ」ことができるはず。だが本当にそうだろうか？　誰が主体者なのかを問わなければ、それは意味をなさない。ワングランは一人で持ちすぎたために、最後には神の怒りを買ってしまった。

レオ・レオニの絵本『フレデリック』の主人公はちょっと浮世離れしたネズミだ。仲間があくせく働いているとき、日常で拾える限りの色彩や音や光を集め続ける。やがて冬になりストックした食べ物が尽きたとき、フレデリックは疲れ切った仲間と、豊かな思い出とともに集めた色や光を分かち合う。そして力を回復したネズミたちは、一緒に冬を乗り越える。世界には、人が所有できるものとできないものがある。よく考えれば当たり前なのだが、ではそれをどう分かち合うのか？　そこに「共に生きる場」としての社会を創るヒントがありそうだ。

さかい・まきこ　総合国際学研究院准教授　アフリカ農村社会学

文献案内

イサク・ディネセン『アフリカの日々』横山貞子訳、河出文庫、二〇一八年

Amadou Hampaté Bâ, *L'étrange destin de Wangrin ou Les Rouseries d'un interprète africain*, Éditions 10/18, Paris, 1978

レオ・レオニ『フレデリック』谷川俊太郎訳、好学社、一九六九年